



PREX
NOW



財団法人 太平洋人材交流センター
Pacific Resource Exchange Center

contents

- page 1 ●ニュース&レポート 1
将来のビジネスリーダー育成研修への取組み
- page 2 ●講師の声
楽しく、学ばせてもらった
メキシコ・グアナフアト州での研修を終了して
- page 3 ●ニュース&レポート 2
インドネシアらしさを大切に
- page 4 ●研修参加者の声
西安市研修団長からのメッセージ
- page 5 ●ひとこと
インターンシップと国際機関ワークショップ
立命館大学・国際関係学部教授 奥田 宏司氏
- page 6 ●PREXだより
事務局ニュース、コラム



われわれの使命は、
常に開発途上国にとって
有益な存在であり続けることです。



ニュース&レポート ①

News & Report

将来のビジネスリーダー育成研修への取組み [アジア・ビジネススクール]

アジア・ビジネススクールは、関西の産業競争力強化のための7つの行動計画のひとつである「ビジネス人材の育成・活用と集積戦略」としてスタートしたプロジェクトである。関西の主要経済団体・国際交流団体で構成されるアジア・ビジネススクール運営協議会(事務局:関経連国際グループ)を実施主体として、平成15年度から3年間、3回にわたり、今後のアジアビジネスを担うリーダー育成を目的に、わが国企業の若手・中堅の幹部候補生を対象に実施されてきた。

コース開設以来、参加者や派遣企業から「異業種の企業からの参加者との将来に向けたかけがいのない人脈形成ができた」、「中国人の同世代のビジネスマンと交流でき、大いに刺激を受けた」などの高い評価を受け、継続実施が決まった。

本年度からPREXとして、本研修の運営を受託し、実施することとなった。長年に亘り培ってきた人材育成に関する経験・ノウハウ、関係諸国との人的ネットワークなどを活用し、アジア諸国との経済・文化・人的交流に資する事業としたい。

第4回アジア・ビジネススクールは、日本企業の将来の幹部候補生32名が、23社から参加した。研修前半の2006年8月23日～26日は神戸で、後半の9月3日～10日は上海で実施し、最終日9月11日、大阪で閉講式を実施した。

カリキュラムとしては、前半日本で中国の社会・経済情勢、中国のビジネス事情、ビジネスリスクに関する講義、事業計画の立て方の講義とグループワーク、後半の上海ではスクール前半で立てた事業計画に関する現地調査及び中国でビジネスを展開する各国の企業への訪問や同世代の経営者との交流などで構成されている。

受講生32名を6つのグループに分け、各グループにて中国で新たな事業を始める事業計画を作成し、それを発表してもらうのがこのスクールの山場の一つだ。

作成した事業計画に対し、現地で活躍しているコンサルタント、企業経営者からのコメントもあり、いい加減なものを作ると辛口のコメントをいただくこととなる。

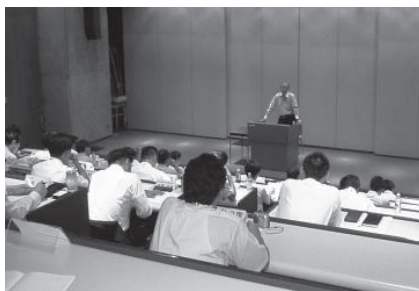
事業計画そのものも大切だが、それを作り上げるまでのグループでの共同作業、自分達でアポイントを取り付け中国にある関連企業へヒアリングに行く過程で学ぶ事柄、こういった作業から、参加者たちは中国でのビジネスとは何か、自分とは違う業界からの参加者の考え方などを学ぶ。そしてアジアビジネスへの理解を深め、将来へのネットワークを築いていく。

短期間の共同作業ではあるが、13日間、寝食を共にすることにより、終盤には参加者同士は他社から来ているとは思えないくらい仲良く、結束が固くなっていった。スクール主任講師としてご指導いただいた神戸大学 磯辺教授を始めとする講師の方々、関経連国際グループの方々、三洋エデュケーションの方々に改めてお礼申し上げたい。

—国際交流部 主任 関野 史湖

お世話になった講師・企業 (指導順、敬称略)

神戸大学経済経営研究所 磯辺剛彦教授、甲南大学 経営学部 杉田俊明教授、大阪大学大学院経済学研究科 浅田孝幸教授、元広州本田汽车有限公司総経理 門脇轟二氏、三菱UFJリサーチ&コンサルティング 太田謙二客員研究員、蘇寧電器、ダイキン工業、サントリー、上海通用汽车有限公司、各グループの調査にご協力いただいた上海各社、蘇州工業園区管理委員会、蘇州世運テクノロジー有限公司、ドーマドアコントロール(蘇州)有限公司、上海地区情報産業ベンチャー聯誼会、南京市百泰服務有限公司 経緯総経理



井植スクール長の基調講演に熱心に聞き入る参加者。



上海ダイキンを訪問。田谷野専務以下、幹部の皆様と記念写真。



楽しく、学ばせてもらったメキシコ・グアナファト州での研修を終了して

[メキシコ海外研修]



松永 仁一 氏

JMコンサルティング
代表

■はじめに

日本・メキシコのEPA発足後1年強経過した時期に開催された、今回の研修については、直前に2度のセミナー延期騒動、大統領選挙後の後遺症による大規模デモや治安の悪化報道等のネガティブ・ニュースがあり、必ずしも楽観できない状況でした。

ところが、1週間のセミナーが終了して強く感じた事は、講師の側も実に楽しく、勉強になった現地セミナーだったという事です！これは、60名強のセミナー参加者のレベルの高さと熱心さ、受け入れの中心となった現地レオン市関係の皆さんの努力とチームワーク、そして日本側のPREX、AOTSの皆さんの我慢と忍耐の対応、交渉によるものと、改めて感謝しております。

■セミナー総括・概要・コメント

日本にとっては2ヶ国目のメキシコとのFTA・EPAですが、同国から見ると実に43ヶ国・地域とのFTAの一つです。そして全輸出の85%を米国に依存しながらいろんな分野で安価な中国製商品にシェアを奪われた状況の中での対日輸出促進を中心としてタイムリーなセミナーでした。

メキシコでは4番目に人口が多いレオン市が、今回のセミナーの現地受け入れの中心になった背景には、中国製品に負けだした、靴等の皮革商品、各種農作物その他関連の中小企業が同市・州に多く、又市幹部に昔、連邦政府で勤務したキャリアの方がおり、幅広く世界的な視野で経済・貿易政策の推進をリードする必要性を強く感じた為と思われます。

その為、予想以上の準備・広報活動が現地でされており、幹線道路路上にセミナー紹介の横断幕の設置や電話などによる参加勧誘活動、セミナー開会式への市長や州幹部の出席・祝辞、そしてセミナー開催中に、新



グアナファトの観光ビジネスについてプレゼンしたグループの皆さんとともに。メンバー全員が、メキシカン・コスチューム(ブルージーンズ、メキシカンハット、白シャツ)で統一。

聞3社、TV2局からの取材もありました。

セミナーは、現地JETRO所長、在日メキシコ人の方と一緒に、アジア・日本市場の重要性とFTA・EPAの活用、今後の日墨ビジネス促進法、リスクとチャンスへの挑戦、21世紀の国際ビジネスマーケティング法、異文化理解、日本企業・消費者の特徴とCSの重要性、経営の柱となる従業員教育・研修と動機付け・待遇の大切さ等々の話をさせて頂きました。

そしてセミナー最終日に参加の皆さんを5チームに分けて、対日輸出のバーチャル会社を創業してもらい、代表の方々からプレゼンテーションと、全員からのQ/Aタイムを設けました。その積極的な行動と高度な内容に、参加の皆さんの理解の深さとレベルの高さに感心しました。

■今後への提言と課題

たった一度のセミナーだけでは現実のビジネスの成功になかなか結びつかない為、今後も日墨の皆さんにお願いしたい事は、類似セミナーの継続やメキシコ他地域での開催、日墨公的機関の皆さんからの実務面のフォロー・サポート(例：“現場”を見て・実感してもらう為に、EUのGateway to Japanのような、SME向けの各種サポート)、世界遺産が好きで、みやげ物を沢山買う日本人観光客の積極的誘致、日本の消費者へのCS(例えば連日ホテルの朝食で食べたサボテン・フルーツやジュースはマ



熱い講演を繰り広げる松永講師

テキラの輸出についてプレゼンテーションしたグループのディスプレイ。



ngoとキーウイの中間的な味でトテモ美味しかったです！難点は種が多すぎる事で、各種の“種無しフルーツ”を開発してきた日本の農業専門家をJICAから派遣されると、アジア製とは競合しない、日本人向け商品の開発が可能と信じます。

又英語でのコミュニケーションの可能な人が意外と少なく、英語力向上もメキシコ側の今後の課題と思います。

■最後に改めて感謝します！

連日、朝7:00から準備をしてくれたレオン市のビビアン女性課長グループの皆さん、約束時間の5分前には来てピックアップしてくれたルイス課長、片道3時間をかけ5日間のセミナーに参加してくれた田舎のオバチャン！

そしてなんといっても、各種のトラブル・難問をテキパキと解決してくれ、又セミナー中に、日本の消費者代表としての意見を求めるとニコニコと発言してくれたPREXの高山嬢！皆さん本当にムーチャス・グラシアス！

■メキシコ海外研修

- ◎実施期間 8/28~9/1
- ◎研修参加者 メキシコ(グアナファト州レオン市、メキシコシティなど)の企業経営者、経営幹部 64名
- ◎関係機関 海外技術者研修協会(AOTS)、レオン市経済振興局
- ◎テーマ 輸出促進のための経営管理手法

■お世話になった方々(講義・訪問順・敬称略)

JMコンサルティング 松永代表、JETROメキシコ・センター 河嶋所長、日墨 ルイス・フィング代表取締役



インドネシアらしさを大切に [インドネシア同窓会フォローアップ]

PREXはジャカルタ(8月30日)及びメダン(9月1日)で同窓会フォローアップセミナー及び同窓会会合を実施した。同窓会フォローアップセミナーではトレード・ネットワーク・ソリューションズ事務局長 大高申一氏に、「魅力ある商品づくり」についてご講演頂いた。ジャカルタでは80名、メダンでは65名の企業経営幹部や行政官が参加した活発なセミナーとなった。また、同窓会会合では、同窓会組織の確認やこれからの活動などについて話し合い、お互いの親睦を深めた。

■ストーリー性のあるセミナーで好評

本セミナーでは冒頭挨拶で貿易省のバルマン局長から、インドネシア政府は2010年に向けてインドネシア産品200品目をグローバルブランドに育てようとのロードマップが示され、インドネシア商工会議所副会頭のゴベル氏からは輸出市場開拓にはデザイン力強化が必須との流れを受けて、大高講師の「魅力ある製品づくり」の講義が始まった。セミナーそのものにストーリー性が明確な中で行われたため、参加者には分かりやすく、好評を博した。

講義には写真を多用し、実際の事例を眼に見える形で説明、日本の伝統産業である漆器業界でこの漆をファーストクラスの機内内装として使用したり、洋食器業界では磨きの技術をiPOD(アップルコ

ンピュータ社製の小型ミュージックプレイヤー)のボディに採用したりとの事例を通じて、普通の素材、技術でも構想力があればブレイクスルーする商品に様変わりすることをメッセージとして参加者に語りかける。

そこには今や高品質だけではものは売れない、さらに消費者に訴求するデザイン、ブランドをつけて付加価値を高めることが魅力ある商品づくりにつながるのマーケティングが見え隠れしている。インドネシア製品にもインドネシアらしさを持った商品づくりでデザイン力を高めることが肝要との訴えに、参加者一同大いに啓蒙された様子で、セミナーの成功を確信した。ジャカルタからさらにメダンに移動し、ここでもRETPEC(地方貿易研修・振興)センターの会場を利用してセミナーを行い、ジャカルタ同様熱心に受講をされた。

■新同窓会組織の構築にむけて

今回同窓会活動の活性化のために企画されたセミナーは、時流にあったテーマだけに同窓会メンバーには参考となるとともに、親交の場にもなった。そして同窓会集いの夕べでは長く会長としてご尽力されたクスナエニ氏から新たにインドネシア・日本友好協会事務局長のヘル氏にバトンタッチされ、メ

ンバー全員の一致で承認された。さらに会長を支える事務局メンバーにアビ女史がノミネートされ、装いも新たに同窓会組織が動き出すことになった。合わせて国土の広いインドネシアだけに地方での活動の活発化を狙い、メダン市にメダン支部としてRETPEC所長フィットラ氏に周辺地方都市のカバーとともにケアして頂くことを了解され、今後の活動の拠点として期待できることになった。

セミナーはじめ、同窓会活動含めてインドネシア・日本友好協会には色々お世話になりました。この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。今後は新しい同窓会組織と一緒に同窓会活動がより有意義なものになるように、日本側からも工夫を行っていききたいとの思いを新たにしました。

—国際交流部長 深田 進

インドネシア同窓会フォローアップ

- ◎実施期間 8/30 ジャカルタ、9/1 メダン
- ◎研修参加者 インドネシア同窓会メンバー及びインドネシア中小企業の経営幹部などジャカルタ80名、メダン65名
- ◎関係機関 PREXインドネシア同窓会、インドネシア・日本友好協会
- ◎テ ー マ 魅力ある商品づくり

お世話になった方々(講義・訪問順・敬称略)

トレード・ネットワーク・ソリューションズ事務局長 大高申一氏、マーケティング専門家 カフィ・クルニア氏、インドネシア商業省IETC・RETPEC



ジャカルタでは参加人数が多く、大講堂を利用したセミナーとなった。



メダンではラウンドテーブルを使用しての和やかな雰囲気セミナーとなった。



セミナー終了後も大高講師への質問が殺到。



同窓会合ではインドネシアの民族楽器を参加者全員で演奏し、親睦を深めた。



現地紙「ジャカルタ新聞」に本セミナーが掲載された。



これからインドネシア同窓会を引っ張っていくヘル・サントソ氏。

西安市研修団長からのメッセージ

[西安市高級管理者研修]

2005年8月に国際協力銀行(JBIC)と京都市の職員が西安市を訪問し、2004年度円借款対象事業である標記事業につき、西安市事業関係者の日本研修受入に関する協議を行い、京都市側は標記事業の成功のために貢献したい旨表明した。その後、京都市の依頼により、当財団が、上下水道関連コンサルタント会社である株式会社日水コンと協力して研修実施を担当することとなった。当財団は、京都市と西安市の今回の事業に係る覚書をもとに、西安市側の窓口である西安市発展改革委員会と研修実施に関する契約書を締結した。

8月22日～9月6日、西安市の当プロジェクト関連部局の責任者20名を対象とした第一期研修を実施した。京都市を中心として、滋賀県、大阪市、東京都の上下水道関連施設等を訪問した。京都市毛利副市長と吉村公営企業管理者上下水道局長、国際協力銀行開発第2部の北野次長を表敬訪問した。研修以外では、京都、大阪、東京の観光や嵐山で日本旅館に宿泊し、京懐石と温泉を楽しむ内容を盛り込み、大好評であった。関係各位の多大なご協力により、非常にスムーズに研修を実施することができたことに心より御礼申し上げる。今回の研修団長より、メッセージをいただいたので紹介します。



張新尚氏

西安市水環境整備事業
第一期研修団長
(西安市発展改革委員会
弁公室副主任)

西安市水環境整備事業第一期研修団一行は、8月22日より日本において14日間の研修を受け、9月6日に帰国しました。今回の研修の目的は達成できたと思います。研修団全員より、京都市上下水道局、京都市国際化推進室、太平洋人材交流センター、日水コンおよび私たちを迎えてくださったすべてのみなさまに心より感謝申し上げます。

このたびの訪日研修は、太平洋人材交流センター、日水コン、京都市、政府機関と共同で実施していただきました。14日間の研修期間中、太平洋人材交流センター、京都市上下水道局、国際化推進室のみなさまの大変なご尽力により、周到できっちりとした、合理的な研修プログラムをご手配いただきました。そのため、研修は引き締まり、豊富で詳細な内容となりました。また、忙しい研修の期間中に、研修生に日本の文化や歴史を理解させ、熱愛する京都の秀麗な景色を楽しませてもらえるような楽しいプログラムも加えていただきました。研修には、3回の表敬訪問、11回の講義、8回の見学、14回の視察が盛り込まれており、京都

市の上下水道局、国際化推進室、都市計画局、建設局、太平洋人材交流センター、京都大学、サントリー京都ビール工場などから80名くらいの方々が今回の研修に協力していただきました。どこでも非常にまじめな態度で、温かく友好的で、礼儀正しく迎えていただきました。事前に十分な打合せや準備をしていただいたお蔭で、すべての研修プログラムがきっちりと実施され、非常に効果のあるプログラムとしていただけました。

14日間の短い研修ではありましたが、大きな収穫がありました。中でも重要な収穫は次の4点です。

- 日本、特に京都そして大阪の水環境整備の歴史と現状、今後の発展方向を理解し、日本の水環境整備事業の基本的な概念についての知識を得たこと。
- 日本の上下水道事業の技術を理解し、日本の当該分野における先進的な管理経験を学んだこと。
- 日本の歴史を理解し、日本独特の文化や雰囲気を感じたこと。
- 日本の社会生活のさまざまな点について非常に好感(愛情)を持ったこと。例えば、省エネ、服装、良好な衛生習慣、社会の規律、高い環境保護意識、そして折に触れ感じた礼儀について。

私たち第一期研修団は日本を離れましたが、まだ第二期、第三期、第四期の研修団が引き続いて訪日します。私たちの交流の道は始まったばかりです。京都市の関連部門の皆様を重ねて御礼を申し上げます。私たちの友情がいつまでも続くことを願っております。

—2006年9月6日



京都市毛利副市長表敬訪問



京都市上下水道局表敬訪問



国際協力銀行表敬訪問



吉祥院水環境保全センター見学

お世話になった方々、企業・団体他 (講義・訪問順・敬称略)

京都市、国土交通省近畿地方整備局琵琶湖河川事務所、アクア琵琶、桂イノベーションパーク、科学技術振興機構、京都大学、京都大学 津野教授、大阪市下水道科学館、大阪市水道局、サントリー京都ビール工場、鳥津製作所、東京都水道局、東京都下水道局、国際協力銀行、日水コン

インターンシップと国際機関ワークショップ

—立命館大学・国際関係学部の国際協力・人材養成のプログラム—



立命館大学・国際関係学部教授
奥田 宏司氏

立命館大学・国際関係学部および国際関係研究科は、「国際協力開発コース」(学部)、「国際協力開発プログラム」(大学院)を設置して、学生・院生が国際協力、途上国人材養成の重要性をひろく学べるシステムの構築をめざしてきました。それらのコース、プログラムにおいては「国際協力論」「国際開発論」「国際交流論」等の科目が20数科目配置されています。

また、コース、プログラムを補完する教育のシステムとしてインターンシップを位置づけ、多くの学生を派遣してきました。1992年度の大学院発足とともに、海外協力基金、国際連合ボランティア計画本部、日本貿易振興会等と協定を結びそれらの機関の海外拠点へ院生を派遣してきました。日本の大学では早期の経験であったと思います。その大学院の経験を踏まえて、学部においても1997年度より3機関と協定を結び、インターンシップをスタートさせました。2005年度には協定機関は42機関となり、65名の学生を派遣しております。

2001年度より、財団法人太平洋人材交流センターにも本学学生を受け入れていただいております。インターンシップを経験した学生からは、「国際協力の現場を体験でき、研修員(マレーシアやラオスの方々)との交流から大変刺激を受けた。東南アジアの経営者と日本企業の関係についての理解も深まった。」という報告が届けられています。インターンシップを経験した学生・院生諸君は、大学の中だけでは接することができない第一線で働いている人の仕事ぶりを知ることにより、将来社会で働くことの意味を考え、そのことで学生生活を実り大きいものにしていきます。インターンシップは、国際関係学部・大学院での正課とともに、国際協力とその人材養成にとっては不可欠になってきています。

さらに、国際関係研究科(大学院)においては06年度から、将来、国際機関職員をめざそうとする院生に対して「国際機関ワークショップ」を発足させました。多くの学生・院生は国際機関に何らかの関心

を持っていますが、「どうすれば実際に国際機関職員への路が開かれるのか」という点については、ほとんど知識や情報をもっていないのが現状です。

国際機関職員をめざすにあたっては、修士号の取得や高い英語力に加えて、実務経験が基本条件となりますので、志望者の多くは、大学院を修了してのち援助機関、企業、政府、NGO等で仕事をし、その経験を経て国際機関職員にチャレンジすることになります。したがって、国際機関職員となるための準備や対策は、国家公務員試験、司法試験、国内の民間企業への就職のための準備とはまったく性格を異にしていることを、まず知ってもらわなければなりません。

そこで、立命館大学国際研究科では、情報の提供、国際機関に関する研究、現役の国際機関職員との交流、個別面談による助言などを通じて、国際機関職員を志望する院生を系統的に支援するワークショップを発足させることにしました。

本ワークショップに所属する院生は、「国際機関研究」という科目を履修します。この科目では現役の国際機関職員らを招聘して講義とゼミナールを行います。具体的には、種々の国際機関の活動の現状と課題、それらの国際機関において日本および日本人が果たしている役割、国際機関の採用・人事政策などについて学びます。この科目の履修後、所属院生はアカデミック・アドバイスを受けながら、留学やインターンシップなど、それぞれの院生に沿った計画を作成し、研究を進めていくことになります。

本ワークショップの発足に当たって、本研究科は元国連事務次長の明石康氏、国際通貨研究所理事長の行天豊雄氏、国連改革担当・特命全権大使の高須幸雄氏を顧問にお願いし、それらの方の助言を得ながら、本ワークショップの高度化に努めています。

事務局
ニュース

10月実施の主な研修

10/2～10/13	ラオス日本センタービジネスコース受入研修 (対象:ラオス日本センタービジネスコースの職員及び同コース成績優秀者3名)
10/10～11/1	出入国管理行政 (対象:アジアを中心とした開発途上国において出入国管理行政に従事している中堅行政官19名)
10/16～11/10	ベトナム日本センター講師研修 (対象:ベトナム・日本センタービジネスコース講師4名)
10/17～10/19	中国海澤市海外研修 (対象:企業の中堅管理職もしくはエンジニア100名(予定))
10/22～10/28	同窓会フォローアップ事業(ミャンマー) (同窓生及び現地企業経営者を対象にしセミナー実施と、現地ニーズの調査 29名)
10/24～11/1	西安市高級管理者研修(第2期) (対象:西安市市政府責任者など10名)
10/31～11/17	マレーシア中間管理職指導力開発プログラム (対象:マレーシアの行政機関に勤務する中堅幹部職員15名)

人の動き

《退任》



深津 猛夫 国際交流部 担当部長 / 8月20日付で出向期間満了、三洋電機株式会社を定年退職

8月20日をもって出向元の三洋電機を定年退職することになり、PREXともお別れすることとなりました。思い起こせば、技術系の研究所勤務から、文化系のPREXでの仕事に大転身をした9年3ヶ月間でした。前半の5年間はJICAのプロジェクト方式技術協力(インドネシア)に専任し、日本のODAの実際を体験することができました。またこの仕事を通して、海外に多くの友人を得られたことも大変有意義な経験でした。後半の4年間は、日本への受入研修を中心に、モンゴルから始めてマレーシア経営者研修、中国中小企業(SME)研修、ブラジル出産時ケア、SME政策、中東欧SME、ベトナム個別研修等の研修を担当し、研修員とのコミュニケーションに苦しんだり楽しんだり、生涯忘れ得ない経験をさせてもらいました。また、自分の趣味であるパソコンスキルを生かし、PREXの皆さんの仕事効率向上にパソコンメンテナンスを通じて貢献できたのではないかと、密かに自己満足しています。ともあれ、PREXの人文字ロゴに現れている、個人を大事にする良い伝統とPREXが、末永く続くことを祈念しております。長らくお世話になりました。

《新任》



村瀬 孝次 国際交流部 担当部長 / 9月1日付で大阪ガス株式会社から出向

PREXに着任し、役職員おひとりずつから丁寧なオリエンテーションを受け、PREXの屋台骨が9人の女性パワーであることを知りました。彼女たちの仕事に対するプロ意識と溢れる情熱、そして、相手の心を和ませる何とも言えない笑顔、がとても印象的でした。早くも、PREXのメンバーに加えていただいたことに大きな誇りと喜びを感じています。
「開発途上国の将来を担う中堅管理者層の育成を支援するとともに、人的交流を活発化し、関西にアジア・太平洋諸国との人的交流の一大拠点を建設しようとするものである。」PREX設立趣意書にはこのような記載があります。設立の趣意はそうとして、個人的には最初にお会いした日にPREX幹部の方が話されたことが強く心に残っています。曰く、「私は、日本のよき理解者、すなわち、日本のファンを草の根レベルで増やしていくことがPREXの活動の基本ではないかと考えています。」
国際交流は個人個人の自発的な行動によって進められるものだと思います。これからも、草の根レベルでの交流を大切に、研修を受ける方々と喜びを分かち合えるような、そんな活動をしていきたいと願っています。引き続き、PREXの活動に対する皆さまの暖かいご理解と力強いご支援をお願いします。

C O L U M N

別れ際の表情は物語る。

国際交流部 担当部長 菅原 宏

昨年末にプロパー職員とある研修の企画・運営を担当した。その研修の目標のひとつは、研修参加者たちが直面している問題の解決をはかるアクションプランを作成することであった。私たちは半年前からミーティングを重ね、研修効果を高めるための工夫を行なった。しかし、研修本番ではアクションプランがなかなか具体化せず、研修参加者たちは何度も音を上げ、リーダー的存在の女性研修参加者からは不満も出た。それでも、指導講師と私たちは粘り強くサポートを続け、なんとか作成にこぎつけることができた。そうして迎えた最終日の別れ際、その女性研修参加者は今にも泣き出しそうな顔に変わっていた。

このことがあってから、私は我々がやったことの結果は、別れ際の彼らの表情に表れるのではないかと考えるようになった。仮にいい加減にやったならば、最後に握手をするときには社交辞令の笑顔で終わるだろうし、工夫と熱意を持って取り組みれば達成感に満ち溢れた顔になるだろう。そして、彼らにとって最高のものとなったなら涙を流してくれるかもしれない。研修参加者に感動してもらえる研修をつくるには、カリキュラムの内容は当然のこと、研修技術、指導講師との連携に加えて、視察先のご協力が必要であり、そのためには、運営サイドが熱意を持って準備し、運営することが大切である。PREXに出向している間に、一度くらいは研修参加者を本当に泣かせるような仕事をしてみたいものである。

PREXの
研修実績

2006年
8月末現在

PREXは、1990年4月設立以降、開発途上国の人材育成事業と、その活動を通しての国際的人材交流促進に努めています。

●研修累計(1990～)

302コース

●受講者累計(1990～)

107カ国・地域 9,319名

【受入(訪日)研修 2,893名 / 海外研修 6,426名】

●2006年度計画

38コース 1,108名

【受入研修 28件 / 海外研修 6件 / 交流事業 4件】

●2005年度実績

35コース 1,167名

【受入研修 25件 / 海外研修 9件 / 交流事業 1件】

編集・発行

財団法人 太平洋人材交流センター
専務理事 三田 昌孝

〒552-0021 大阪市港区築港2丁目8-24
pia NPO 5階 502号室

TEL 06-4395-2650
FAX 06-4395-2640

ホームページ: <http://www.prex-hrd.or.jp>
電子メールアドレス: prexmail@prex-hrd.or.jp